

阪神の湯浅京己投手を襲った難病の正体

野球投手に多発、黄色靭帯骨化症

プロ野球阪神の湯浅京己（あつき）投手（25）が国の指定難病「黄色靭帯（じんたい）骨化症」の手術を受け、8月末に無事退院したことがニュースになりました。アスリートを襲った黄色靭帯骨化症はどういった病気で、何が原因なのでしょうか。

黄色靭帯骨化症は、背骨（脊椎）の中にある脊髄が圧迫されて起こる病気（脊髄症）の一つです。脊髄の後方にある本来は薄い線維組織（黄色靭帯）が骨のように硬く厚くなり、脊髄を圧迫し下半身の神経のまひが起こります。

68歳男性Aさんは、4年前から両方の足先が軽くしびれていました。3年前、しびれが強くなり近くの整形外科を受診、腰のX線写真を撮りましたが、異常はありません。

しばらく様子を見ましたが、やがてしびれが膝の下まで拡大し、歩行時に足が地面に接している感覚（接地感）が薄れ、歩行が不安定になりました。精査目的で総合病院を紹介され、MRI検査を受け黄色靭帯骨化症と診断されました。

最近では膝から崩れ転倒しそうになるため、歩行につえが欠かせません。病状が進行しており、手術を受けました。3週間の入院とリハビリを経て、つえなしで歩けるようになりました。ただ、手術後6カ月経過した今も足のしびれは残り、接地感は乏しいままです。

脊椎はブロック状の骨（椎骨）が縦に積み重なってできています。後方の内側には空間（脊柱管と呼ぶ）があり、脳と体をつなぐ神経細胞と神経のかたまりの脊髄が入っています。

椎骨と椎骨の間にはその隙間を補強し、適度な動きと安定性をもたらす弾力性のある薄い線維組織（靭帯）があります。脊髄の前方には後縦靭帯とよばれる靭帯があり、後方には黄色靭帯があります。

■ 最初は軽いしびれ、締めつけ感…

脊髄は脊柱管の中の狭い空間に入っています。前後の靭帯が硬く厚くなると脊髄は圧迫され、しびれやまひが生じます。

後縦靭帯が厚くなると後縦靭帯骨化症という病気で、頸椎（けいつい）（頸部（けいぶ）の脊椎）に多く、手足のまひが起こります。黄色靭帯が厚く硬くなるのが黄色靭帯骨化症で、腰の上あたりの胸椎に多い病気です。ともに原因が不明で、治癒が難しく、国の指定難病です。

黄色靭帯骨化症の正確な患者数は分かっていません。ただ、指定難病の受給者証を受けている人は 3000 人ほどです。発症は 40 歳以上に多く、男女の差はありません。

発症しやすい家系があり、欧米人に比べて日本人に多いことから遺伝も関係しています。

特徴的なのは運動選手に多いことです。とくに野球の投手に多く、プロ野球投手で阪神などの監督を務めた星野仙一さんもその一人でした。同年代と比較して 10 倍以上の発症率です。野球選手では左右差が認められ、非利き手側の黄色靭帯がより厚くなることも特徴です。つまり、投球動作による物理的ストレスも関係していそうです。

症状は年単位でゆっくり進むことが多く、気づきにくい病気です。最初は軽いしびれや締めつけ感から始まり、進めば歩行困難になったり、排尿や排便が難しくなったりします。転倒や外傷をきっかけに急に悪化することもあります。

特効薬はなく、現時点では脊髄の圧迫を取る手術が唯一の治療法です。ただ、手術をしても完全に治るのは難しく A さんのように何らかの症状が残ることが多いのが課題です。